

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成 24 年 5 月 25 日現在

機関番号：12603

研究種目：基盤研究（C）

研究期間：2008～2011

課題番号：20520054

研究課題名（和文） イスラムのグローバル化による「イスラム共同体」の構造的変化についての研究

研究課題名（英文） Globalization of Islam and Structural Change of “Muslim Community”

研究代表者

八木 久美子 (YAGI KUMIKO)

東京外国語大学・大学院総合国際学研究院・教授

研究者番号：90251561

研究成果の概要（和文）：これまでいわゆるイスラム世界の動きに関し、地域としてはアラブ、中東諸国が新しい展開の発信源であり、さらに階層としてはウラマーと呼ばれる専門家の言説だけが公的なものたりえると捉えられてきたが、この研究では、西洋文化に親しみ、グローバル化により対応しやすい「俗人」であるイスラム教徒の力が拡大している事実焦点を当てることにより、グローバル化によって引き起こされた「イスラム共同体」の構造的変化を明らかにするものである。

研究成果の概要（英文）：It has been considered that the center of the Islamic world is the Arab or Middle East countries and the religious discourse in public space is exclusive to the Ulama. This study clarifies the structural changes of Muslim community brought about by globalization, focusing on the growing power of ‘lay’ Muslims who are familiar with western culture and highly adaptable to globalization.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2008年度	1,300,000	390,000	1,690,000
2009年度	700,000	210,000	910,000
2010年度	600,000	180,000	780,000
2011年度	600,000	180,000	780,000
年度			
総計	3,200,000	960,000	4,160,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：哲学・宗教学

キーワード：イスラム、権威、ウラマー、聖職者、俗人

1. 研究開始当初の背景

2007年度まで、「20世紀後半のアラブ世界におけるイスラム教徒の「他者／自己」像の形成とその変容」という研究を行ってきたが、そのなかで明らかになったのは、20世紀後半においてイスラム教徒の抱く他者像およびそれに基づく自己像が形成される過程には、西欧やアメリカなどに一定期間生活したことのあるイスラム教徒の滞在

記、紀行文が大きな影響を及ぼしているという点であった。

コーランやハディースなどいわゆる宗教テキスト以外のものが、イスラム教徒の他者／自己認識の形成に影響しているという点は近代以降のイスラムを理解するうえで重要な点である。また、こうした文章の書き手はそのほとんどがウラマーではなく、留学生や旅行者など一般の信徒であること、しかしそれでもなお読者のイスラム教徒観を動か

していることは注目に値する。

グローバル化の進む現在、これと同じ働きをしているのは、いわゆる欧米文化に親しんでいるイスラム教徒から上がる声だと考えられ、こうした人々がイスラム共同体の構造にどのような影響を及ぼしているかが重要なテーマとして浮かび上がった。

2. 研究の目的

従来、イスラム教徒の言説には2つの中心があるとされてきたが、それを再検討し、イスラム共同体に新しい構造が生まれつつあることを示すのがこの研究の目的である。

二つの中心の一つとされてきたのは、俗人・一般信徒に対するイスラム諸学の専門家としてのウラマー集団による言説であり、これは「イスラム共同体」内の階層による区分に基づいたものである。そしてもうひとつは、世界を「イスラムの家」と「戦争の家」に二分して捉え、「戦争の家」はいつか消えるべきものであるという前提に立ち、意味ある言説は「イスラムの家」においてのみなされるという空間的な区分によるものである。

ひとつめの中心であるウラマーに関していうと、確かにウラマーは厳密な意味では聖職者ではなく、「得度」するわけでもなければ「叙階」されるわけでもないので、排他的に定義することは不可能である。

しかしながら、ではウラマーという概念自体が無効であるかと言うとそうではない。なぜなら、あらゆる社会に知識人を呼ばれる人々がおり、ゆるやかなつながりによって一定の集団を形成しながら社会のなかで指導的な役割を果たしているのと同じように、イスラム教徒の社会においてはウラマーがこの役割を果たしてきたからである。まさに彼らの存在こそが、その社会のイスラム性を保証あるいは拡大してきたと言ってもよい。

近代以降、国民の間に教育が拡大し、さらに西洋近代的な高等教育を経た新しいタイプの知識人という集団が登場することによって、ウラマーは社会の唯一の知識人という立場は失ったものの、イスラムについてはウラマーこそが権威を持つという理解は長く揺るがなかったと考えられる。

その意味で、少なくとも20世紀の終わりころまでは、イスラム共同体の成員には、権威を持ってイスラムについて語ることでできるウラマーと呼ばれる人々と、それに導かれて動く一般の信徒の二種類がおり、イスラム共同体の動きを理解するためには、前者の声に耳を傾けていけばよいという見方は現実を反映したものであり、決して間違っているとは言えなかった。

しかし現在のイスラム教徒の社会で起きていることは、これを覆すような性格のもの

である。ムスリム同胞団のような政治的なイスラムの担い手が一般信徒であることはよく知られているが、最近では政治を離れた場でも一般信徒が声高にイスラムについて語っている。

もうひとつは検討したいのは、これまで当然とされてきたのは、「戦争の家」(非イスラム圏)に対する優位を意味する「イスラムの家」(イスラム圏)という認識である。地表を二つの部分に分けて考える、純粋に空間的な区分である。

古典的な考え方によれば、「戦争の家」に生活することはイスラム教徒として慎むべきこと、あるいは絶対に避けるべきことであった。そのため、経済的、あるいは政治的な理由によって、欧米などで生活する「移民」は、その存在が消極的に評価され、黙認されることはあっても、イスラム共同体の中で彼らの声に耳が傾けられることなどありえなかった。

重要なのは、「イスラムの家」と「戦争の家」の区分は、世界をどう認識するかという地理的な問題であるだけにとどまらず、他者たる非イスラム教徒との関係を論じるうえでのこれまで議論の枠組みは何であったかという問題でもある点である。

なぜならば、他者である異教徒と共に暮らすことがイスラム教としての生き方に決定的なダメージを与えるのか、それとも他者とともに生きることこそ、イスラムの存在意義を拡大する良い機会なのか、それが問われることになるからである。

とりわけ「移民」の数が増え続け、世界のなかで存在感を大きくする中で、彼らはイスラム共同体にとって無視できる存在ではなくなってきた。彼らが自ら声を上げ始めたことも従来の考え方に再考を迫る要因となっている。アラブ諸国や東南アジアの「イスラムの家」に生きるイスラム教徒が、こうした人々から発せられる声に耳を傾けるのはすでに従来の二分法が意味を失いつつあることの証とも言える。

このように、グローバル化の進行は従来、イスラムの伝統的な言説のなかで大前提とされていたふたつの中心の意味を共に揺るがしていると考えられる。それを受け、この研究では、これまでにない地域、階層、社会集団が発信源になり、イスラム共同体の方向付けに重要な意味を持つようになっていくことを明らかにすることを目的とした。

3. 研究の方法

この研究では、おもに二つの対象に焦点を絞り込んだ。一つはイギリスを中心とする非イスラム圏に生きる「移民」のイスラム教徒、もう一つはエジプトを中心として、ウラマー

ではないにもかかわらず、説教師として活躍する人々とその支持者たちである。

前者に関してはイギリスのイスラム教徒による組織が見せる運動のあり方、その際用いられるロジック、またイギリスのイスラム教徒を読者層とする雑誌の見せる特色や傾向を追うことによって、伝統的なイスラムの言説が想定していなかった新しい環境に置かれたイスラムが取りうる新しい方向性を探りだした。

なかでも重要なのは、「移民」のイスラム教徒は自らをイギリス人イスラム教徒と認識しており、イスラムを（アラブ、南アジアなどの）地域性からまったく切り離すことによって、本来の普遍宗教の姿に戻そうとしていると考えらえる点であった。

彼らの言説を詳細に追うことにより、西欧文化と親和性のあるイスラムのあり方が模索され、その試みの中でイスラムの真の意味が問い直される過程を明らかにした。とくに異教徒との日々の交わりの中で、イスラム教徒の枠を超えて、全人類に向け、イスラムが持つ意味を問い直す試みを分析の対象にした。

後者のエジプトの説教師をめぐる現象に関しては、これによってグローバル化時代に適したイスラムのあり方を議論する一般信徒たちの活発な動きを追い、一般信徒の言説を拾い上げていった。

りわけグローバル化が進行する中、新しい経済の動きに自在に対応し、かつインターネットや衛星放送など新しいメディアを使いこなしながら宗教活動に邁進する説教師たちの言説が重要な資料になった。これらを通して、一つの大きな問題、つまりなぜこうした説教師は、彼らがウラマーではないことを誰もが知りつつも、説教師として成功しうるのかという点を探っていった。

4. 研究成果

この研究によって、第一にイスラムにおける「聖職者」（ウラマー）と「俗人」（一般信徒）という伝統的な二分法が変化をしつつあるということ、第二にウラマーの存在が否定されるわけではないにしても、イスラム的言説空間において「俗人」の声が急激に拡大しつつあり、それは「戦争の家」に生きるイスラム教徒の声にも言えることが明らかになった。

インターネットや衛星放送といった新しいメディアが果たした役割はどれほど強調しても足りないくらいであるが、最も重要なのは、それまでウラマーの間で専有されていたハディース集やコーラン解釈書などの宗教テキストに一般信徒が自由にアクセスできるようになったこと、そして一般信徒がそ

うしたテキストをもとに行きついた自らの意見をインターネットを通して発信し、サイバースペースのなかで議論が交わされ始めたということである。

こうした動きを促進する社会的背景には、グローバル化が進行し、社会の仕組みが複雑さを増すなかで古典的な知の専門家であるウラマーには対応できない部分が多くなる一方、社会の（再）イスラム化を求める声は小さくなるどころか逆に大きくなっているという事実がある。

たとえば経済活動においてであれ、科学技術に関する研究活動においてであれ、欧米諸国の相手と深いつながりを持たずに生きることはほぼ不可能という状況の中であら、イスラム教徒として生きるにはどうすればいいのかという形で問が発せられるということである。

こうした問いにもっともよく答えられたのは、そうした現場での経験が深く、自ら試行錯誤を繰り返す、イスラムについて独学で学んだ人々であった。言い換えるならば、彼らはウラマーにはなしえない、別の「権威」ある語りをなしえたということである。

彼らを中心として、ウェブ上で取り交わされる言説、衛星放送を中心とするテレビの宗教番組、低廉な価格で大量に販売される小冊子などを資料として、イスラムに関する語りという点では同じであっても、ウラマーのそれと、こうした新しいタイプの説教師のそれが、内容においても、スタイルにおいても全く異なる。

その意味で、ウラマーの存在自体が否定されるということはないにしても、ウラマーでないものにしか語りえない「イスラム的」領域があることがすでに広く承認されていることが確認されたのである。

また、これに関連し、これまで「戦争の家」という辺境に生きる者として疎外される傾向が強かった西欧の「移民」イスラム教徒がグローバル化あるいは西洋化の波を最前線で経験するイスラム教徒として評価しなおされているという事実をも明らかにすることができた。

グローバル化の時代には、たとえイスラムの聖地メッカに暮らしている者であっても、メディアを通して、そして人や物の地球規模の動きを通して、非イスラム的な世界からの影響に去られていることが、従来の地理的二分を無効にし、かつ従来は「戦争の家」と呼ばれてきた地域に暮らす移民のイスラム教徒の経験こそ、世界のイスラム教徒がそこから学ぶべき先例であるという感覚が生まれているということである。

これらの点を視点を変えてみると、伝統的な「イスラム共同体」という概念が最終的には理念的なものでしかありえなかったのに

対し、グローバル化時代のそれは実態に変わりつつあるというふうに評価することもできるだろう。

このようにして、「イスラムの家」と呼ばれる地域に生きるウラマーと呼ばれる専門家がイスラム共同体のかじ取りをするという伝統的な論理構造とは別の構造が誕生しているということを検証することができた。現在のイスラムを理解するには、著名なウラマーの言説や公的な宗教機関から出される声明を追うだけでは不十分であり、実業家、大学教授、社会運動の担い手など、さまざまな主体に耳を傾けなければならないことを明らかにできたのは大きな成果と言える。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計 3件)

①八木久美子、生活者のイスラム—エジプトの例を中心に、現代宗教 2011 年号、査読無、2011 年、241—257

②八木久美子、多様化するイスラムのかたち—「俗人化」のもたらす可能性、総合文化研究、査読無、13 巻、2010 年、119—134

③八木久美子、イスラムの「俗人」スター説教師、東京外国語大学論集、査読有、77 巻、2008、117—133

〔学会発表〕(計 3件)

①八木久美子、グローバル化のなかのイスラム—イスラムの市場価値化をめぐって、日本宗教学会：関西学院大学、2011 年 9 月 3 日

②KUMIKO YAGI, New Muslim Preachers as an Aspect of Re-Islamization, XXth World Congress: International Association of History of Religions: University of Toronto, 19 Aug. 2010

③八木久美子、「俗人」説教師の活躍とイスラムにおける権威の問題、日本宗教学会：京都大学、2009 年 9 月 12 日

〔図書〕(計 2件)

①八木久美子、「ファッションから見るイスラム教徒の女性多たち」『宗教と現代がわかる本 2012』、平凡社、2012 年、146—149

②八木久美子、グローバル化とイスラム—エジプトの「俗人」説教師たち、世界思想社、

2011 年、254 頁

6. 研究組織

(1) 研究代表者

八木 久美子 (YAGI KUMIKO)

東京外国語大学・大学院総合国際学研究院・教授

研究者番号：90251561